

平成17年度（第49回）
岩手県教育研究発表会発表資料

特別支援教育

小学校の特殊学級における一人一人に応じた 校内交流の展開に関する研究

—小グループ編成した交流学級との共同活動をとおして—

平成 18 年 1 月 12 日
長 期 研 修 生
所 属 校 一 関 市 立 大 原 小 学 校
氏 名 伊 藤 淳 一

< 目 次 >

I	研究目的	1
II	研究仮説	1
III	研究の内容と方法	1
1	研究の内容と方法	1
2	授業実践の対象	2
IV	研究結果の分析と考察	2
1	小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想	2
(1)	交流教育の現状	2
(2)	一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本的な考え方	3
(3)	一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想図	4
2	基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察	5
(1)	調査計画	5
(2)	調査結果の分析と考察	5
3	基本構想に基づく手だての試案	6
(1)	手だての試案作成についての基本的な考え方	6
(2)	手だての試案	6
(3)	単元の指導計画作成について	7
(4)	授業実践について	7
(5)	評価について	7
(6)	検証計画	8
4	授業実践及び実践結果の分析と考察	8
(1)	手だての試案を取り入れた授業実践例	8
(2)	実践結果の分析と考察	14
(3)	授業実践前と実践後での特殊学級児童の変容について	16
(4)	授業実践後の交流学級担任の意識について	17
5	小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する研究のまとめ	18
V	研究のまとめと今後の課題	19
1	研究のまとめ	19
2	今後の課題	20

<おわりに>

【参考文献】

I 研究目的

特殊学級において、交流教育は児童の生活経験を広め、社会性を養い、人間関係を育てる上で、重要な場面であり、学校の教育活動全体を通じて、通常の学級の児童と活動をともにする機会を積極的に設けることが求められている。

しかし、特殊学級児童は、交流学級児童とかかわる場面において、受け身の姿勢が多く見受けられる。この要因として、特殊学級児童が日常の学級集団から離れることや授業に見通しをもてないでいることに不安を感じ、生活面や学習面に対して消極的になっていると考えられる。

このような状況を改善するためには、特殊学級児童全員が集団で交流学級児童とかかわる場を設定し、交流学級児童とかかわる経験を増やしていくことが必要である。そのためには、交流学級を小グループに編成して、各グループと特殊学級児童全員が交流する単元を展開するとともに、特殊学級児童が自信や見通しをもって取り組める体験的な共同活動を行い、児童が安心して取り組めるように指導することが大切である。

そこで、この研究は、小グループ編成した交流学級との共同活動をとおして、特殊学級児童にとって一人一人に応じた校内交流の展開の仕方を明らかにし、特殊学級の校内交流の充実に役立てようとするものである。

II 研究仮説

特殊学級と交流学級との共同学習において、次のような手だてを講じることにより、特殊学級児童一人一人に応じた校内交流を展開することができるであろう。

- 1 交流生活班選択のためのカードを作成し、交流学級と共同活動する小グループを選択する。
- 2 活動選択のためのカードを作成し、共同学習の単元の指導計画に基づいて共同活動を行う。

III 研究の内容と方法

1 研究の内容と方法

- (1) 小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想の立案（文献法）

小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本的な考え方をまとめ、小グループ編成した交流学級との共同活動についての基本構想を立案する。

- (2) 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察（面接法）

基本構想に基づき、校内交流の実態調査を行い、その調査結果の分析と考察から、手だての試案作成に必要な資料を得る。

- (3) 基本構想に基づく手だての試案の作成

基本構想及び実態調査の結果とその考察に基づき、小グループ編成した交流学級との共同活動についての手だての試案を作成する。

- (4) 授業実践及び実践結果の分析と考察（授業実践・観察法・面接法）

手だての試案に基づき、授業実践を行うとともに、検証計画に基づいて特殊学級児童の変容状況の分析と考察を行う。

- (5) 小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する研究のまとめ

小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開についてまとめる。

2 授業実践の対象

県内公立小学校 第1学年(39名)、第2学年(37名)、第6学年(24名)、
知的障害特殊学級 1年(1名)、2年(2名)、6年(1名) 計4名

IV 研究結果の分析と考察

1 小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想

(1) 交流教育の現状

ア 国と県の動向から

交流教育については、平成10年改訂された「幼稚園教育要領」と小学校・中学校及び高等学校の「学習指導要領」において、盲・聾・養護学校との連携や障害のある児童生徒や高齢者との交流の実施について初めて一律に明文化され、「小学校学習指導要領」では、平成14年4月1日から全面実施された。また、障害者基本法の一部改正(平成16年6月4日施行)によって、「国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない」と規定された。

これらの動向は、「交流教育」がこれまでの努力規定から「交流及び共同学習」の義務規定に変わったことを意味している。

また、これら国の動向を踏まえ、岩手県教育委員会においては、交流教育が充実・発展するように各幼稚園、各学校に対し「交流教育展開の手引」(平成13年3月特別支援教育指導資料No.25)を配布した。

イ 保護者、教員のニーズ調査から

岩手県教育委員会では、「岩手県特別支援教育推進プラン」策定にあたり、平成14年に実施した「保護者、教員のニーズ調査」の結果によると、小・中学校特殊学級在籍児童生徒の保護者は、特殊学級に在籍する子どものため、今後最も力を入れて行うべき交流教育として、過半数が校内交流をあげている。このことから、特殊学級に在籍する児童と通常の学級に在籍する児童との校内交流の充実が望まれている。

ウ 校内交流の現状と課題

本県において校内交流は、行事交流と日常の交流のほか、教科交流を中心に行われており、特に教科交流については、教科の種類や児童の実態に応じてさまざまな形態で行われている。

しかし、校内交流における特殊学級児童の学習面のみならず交流学級児童とのかかわりには課題がある。例えば、行事交流の場合、特殊学級児童は交流学級(「交流学級」は、本校では一般的に使用されており、協力学級と同義語である、以下同じ)児童にお世話されることに慣れ、主体的に交流学級児童とかかわって活動できないでいる現状にある。日常の交流においても同様のことが言え、交流学級児童に積極的にかかわろうとすることができないでいる。また、特殊学級担任は教科交流において、事前・事後指導が十分できないでいることにより、一人一人に応じた校内交流の展開が図られているとは言い難く、個に応じた指導が不十分である。

したがって、これら特殊学級児童の校内交流における行動や態度の要因を分析し、一人一人に応じた校内交流の展開の仕方を追究することは意義のあることと考える。

(2) 一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本的な考え方

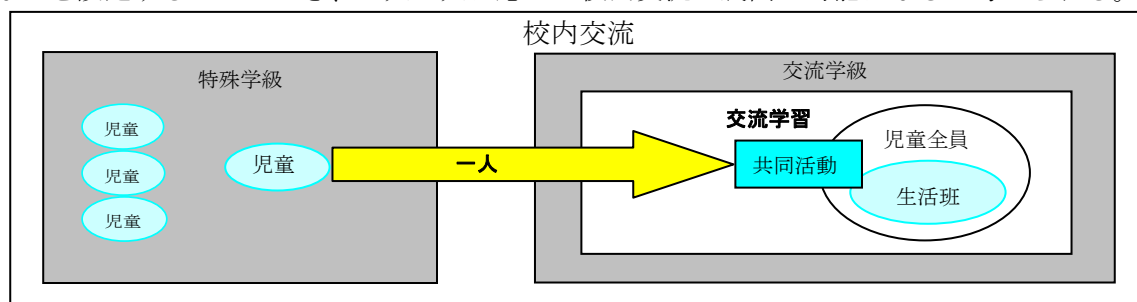
ア 特殊学級の教育課程と交流学級の教育課程を関連させた展開の工夫

特殊学級児童は、校内交流で特殊学級児童の興味・関心に基づいた学習内容が設定されていないことで、意欲的に学習に取り組むことができないことがある。これは、特殊学級児童が交流学級で学習を行う場合、交流学級が主体となって行う学習になることが多いためである。そのことにより特殊学級児童が依存的な気持ちを強めて、自信や見通しをもてないで学習に積極的に取り組めず、受身的なかかわり方が多い現状にある。

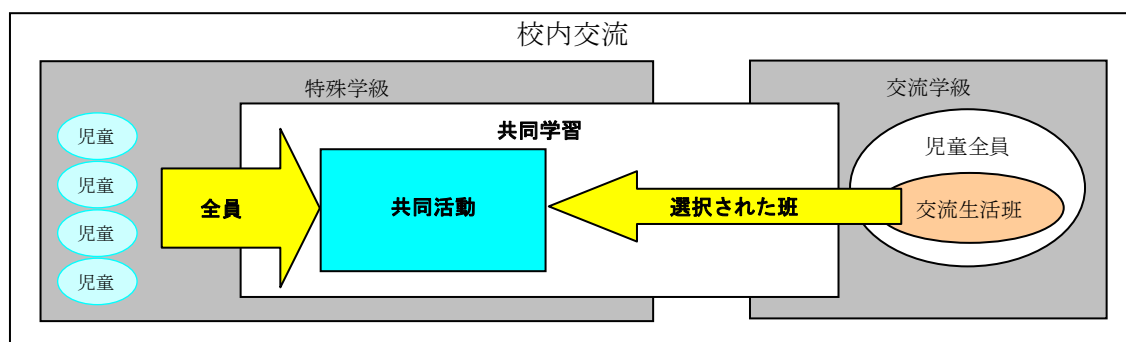
そこで、特殊学級児童にとって生活単元学習などで経験した活動と交流学級の学習内容との関連をもたせたり、特殊学級児童の得意な活動を共同活動の中に取り入れたりするなどして、特殊学級児童が自信や見通しをもって取り組める活動を設定する必要がある。本研究では、特に子どもの興味・関心に基づいた内容を設定しやすい特別活動において、共同学習を行うこととする。

イ 共同学習と共同活動に視点をおいた展開の工夫

交流学習は、交流学級の教育課程に基づいて行われており、特にも教科交流については交流学級児童が主体となって行われている。それに対して本研究の共同学習とは、特殊学級の教育課程と交流学級の教育課程を関連させて、特殊学級児童が主体となって行う学習である。その学習の中で、特殊学級児童と交流学級児童とが共同で取り組む活動を共同活動とする。つまり、これまで行われてきた交流学習では、【図1】に示すように特殊学級児童と交流学級児童全体や班単位を中心とした共同活動である。しかし、本研究における共同学習は、【図2】に示すように特殊学級児童が抱えている不安を軽減させて、学習内容に見通しをもち主体的に共同活動に取り組むものである。さらに、本研究の共同学習では、意図的に特殊学級児童全員と選択された交流生活班との共同で取り組むペア学習や班活動が、既存の交流学習以上に多く設定されている。よって、個に応じた学習形態などを設定することができ、一人一人に応じた校内交流の展開が可能になると考えられる。



【図1】これまでの校内交流における交流学習



【図2】本研究における共同学習

交流学習は、前述の【図1】に示すように特殊学級児童が一人で交流学級に行き、大人数の中で学習に取り組むことが多いため、普段少人数で学習している特殊学級児童にとっては、大人数の中で活動することを不安に思うことが多いと思われる。そこで、特殊学級児童が慣れた学習環境で安心して活動に取り組めるようにするため、学習場所を特殊学級で行ったり、交流学級の1つのグループ（交流生活班）を選択したりするなど共同学習の展開を工夫することが必要であると考え。さらに、特殊学級児童が交流学級児童とかかわる人数を段階的に増やしていき、大人数でも安心してかかわることができるように配慮する必要がある。

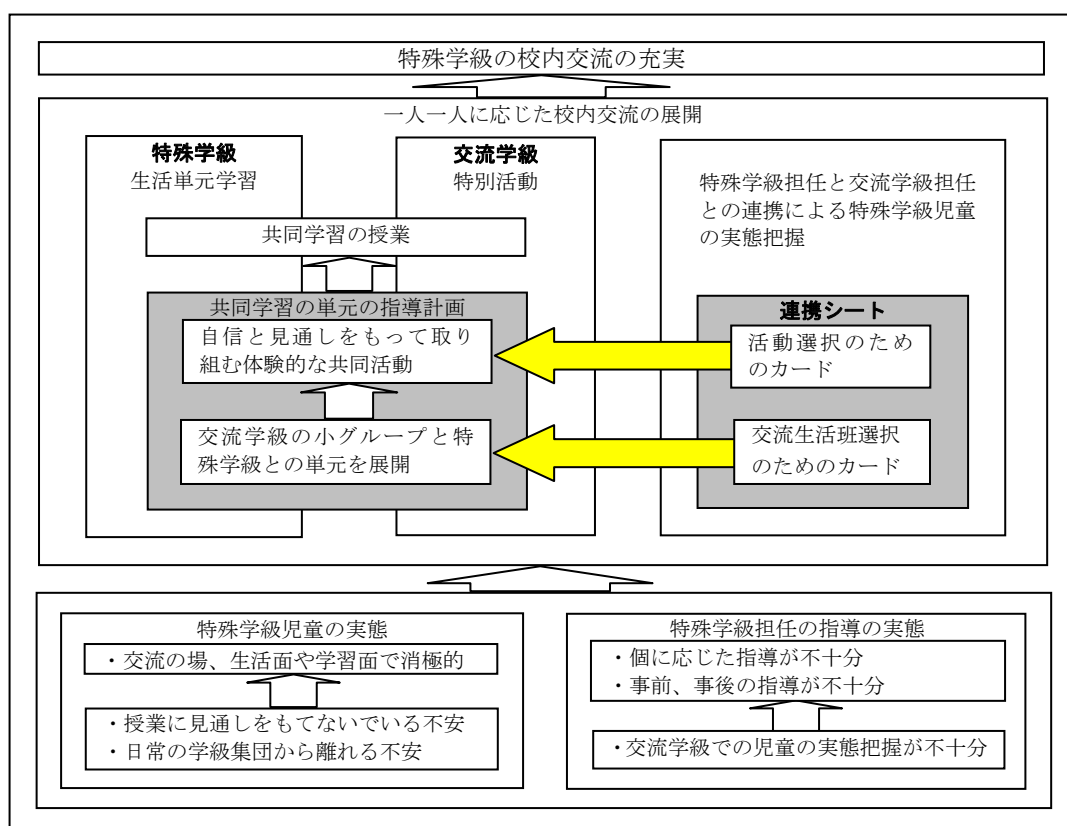
以上のように、共同学習の展開を工夫することによって、特殊学級児童が交流学級で学習することに自信をもち、校内交流に対して特殊学級児童一人一人が意欲的に学習活動に取り組むことができると考える。また、交流学級児童が特殊学級児童と直接ふれ合う機会が多くなることにより、交流学級児童にとって共に生きる大切さを考える機会となり、将来の生き方につながると思われる。

ウ 特殊学級担任と交流学級担任との連携による特殊学級児童の実態把握

特殊学級担任は、交流学級での特殊学級児童の様子を十分に把握できないでいることが少なくない。また、交流学級担任は、特殊学級での特殊学級児童の様子を十分に把握できないでいると思われる。そこで、特殊学級担任の情報と交流学級担任との情報をまとめた連携シートによって、お互いの情報を共有することが必要である。そのことにより、特殊学級担任と交流学級担任が連携し、特殊学級児童の実態を共同学習の単元の指導計画に生かすことができるのではないかと考える。

(3) 一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想図

上記の考えに基づき【図3】のように「一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想図」を作成した。



【図3】一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想図

2 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察

(1) 調査計画

ア 目的

特殊学級と小グループ編成した交流学級との共同活動をとおして、一人一人に応じた校内交流の展開の仕方を明らかにするための指導の手だてに必要な資料を得る。

イ 対象

県内公立小学校特殊学級担任及び交流学級1年・2年・6年担任（計4名）

ウ 内容

特殊学級と交流学級における特殊学級児童の様子、特殊学級児童への指導の工夫・留意事項、特殊学級担任と交流学級担任との連携の様子、校内交流を進めていく上での課題についての聞き取り調査を行った。この調査結果を基に、必要とされる特殊学級担任と交流学級担任との連携を生かした小グループの選択と学習活動の選択の連携シートの項目を設定する。

(2) 調査結果の分析と考察

特殊学級担任と交流学級担任からの聞き取り調査を行った。その結果を調査項目ごとに整理すると【表1】のようになり、調査の分析と考察はア～イのとおりである。

【表1】調査結果

特殊学級児童の交流学級での様子	交流学級では、特殊学級児童が積極的に活動に取り組んでいる姿が少ない。 特殊学級児童が交流学級児童とかわることが少ない。 生き生きと楽しそうな姿を見ることが少ない。
交流学級での指導の工夫・留意事項	交流学習を行う場合、特殊学級の低学年児童には、サポート教師がついて支援に当たっている。
特殊学級と交流学級担任との連携の様子	特殊学級担任と交流学級担任との情報交換が朝の全職員打ち合わせの後などに限られ、話し合いの時間が短い。 話し合う内容については、主に交流する教科の時間と場所を確認する程度、交流学級での学習の様子を情報交換することは少ない。
校内交流を進めていく上での課題	特になし。

ア 交流学級での指導の工夫・留意事項について

特殊学級担任は、見通しや自信をもって取り組むことのできる活動を設定していることにより、特殊学級児童は、特殊学級では積極的に学習している。しかし、交流学級においては、低学年ではサポート教師が入る等の配慮はあるものの、特殊学級児童の実態に応じた学習内容を設定するまでには至っていない。よって、特殊学級児童が交流学級の学習に自信や見通しがもちにくく、積極的に学習に取り組むことができないでいると考えられる。このことから、交流学級での自信と見通しをもって取り組むことのできる活動を設定するための手だてが必要であると考え。

イ 特殊学級と交流学級担任との連携の様子について

特殊学級担任と交流学級担任との情報交換においては、必要性を感じていながらも、情報交換の時間を確保できないことなどにより、十分な連携が図られていない現状がある。このことから、特殊学級担任と交流学級担任とが短時間で必要な情報を簡単に交換できる手だてが必要であると考え。

3 基本構想に基づく手だての試案

(1) 手だての試案作成についての基本的な考え方

特殊学級担任と交流学級担任との連携をとおして、特殊学級児童の理解を深め、指導を組む手がかりとして活用できるよう、手だての試案として【図4】と次頁【図5】に示すようなカードを作成した。そして、そのカードに特殊学級担任と交流学級担任との情報を記入する。さらに、そのカードの情報を一枚の連携シートにまとめ、その情報を活用して単元の指導計画を立案、実践、評価することにより、特殊学級児童にとって一人一人に応じた校内交流の展開を図ることができると考えた。

また、手だての試案の基本的考え方は、以下の(2)から(5)のとおりである。それを図に表したものが【図6】である。

(2) 手だての試案

ア 連携シートについて

共同学習において、特殊学級と交流学級との教育課程を関連させる場合、特殊学級担任と交流学級担任とが連携を図って、一人一人に応じた校内交流の展開を考えることが必要である。しかし、担任間の連携に多くの時間を使用することは物理的に難しいなどの理由から、短時間で効率よく児童の実態を把握できるように連携シートの項目を精選して設定した。そして、「交流生活班選択のためのカード」と「活動選択のためのカード」を作成し、交流学級と共同活動をする小グループの選択を行い、共同学習の単元の指導計画に基づいて共同活動を行うことによって、一人一人に応じた校内交流を展開することができると考える。

イ 交流生活班選択のためのカードについて

「交流生活班選択のためのカード」とは、特殊学級担任と交流学級担任が、特殊学級児童と交流学級児童の人間関係の情報を共有し、生活班選択のための配慮事項をまとめたカードである。具体的な記入の仕方は、「交流学級との人間関係」の「特殊学級」と「交流学級」の欄には、それぞれの担任が特殊学級児童にとって仲のよい友達の名前を記入し、かかわりが好ましくない児童についてその理由を記入する。そして、「交流生活班選択のための配慮」の欄に、特殊学級児童にとって、安心してかかわることができる児童の氏名や性格（やさしい）を記入し、その情報を基に、交流学級の生活班を選択する。

したがって、交流学級児童との人間関係を考慮して生活班を選択することは、特殊学級児童にとって安心してかかわりをもつことができるメンバー構成になると考える。

		交流生活班選択のためのカード	
		交流学級児童との人間関係	交流生活班選択のための配慮
A児	特殊学級	○	6年交流生活班（○班） ○
	交流学級	○	
B児	特殊学級	○	2年交流生活班（○班） ○
	交流学級	○	
C児	特殊学級	○	○
	交流学級	○	
D児	特殊学級	○	1年交流生活班（○班） ○
	交流学級	○	

【図4】 交流生活班選択のためのカード

ウ 活動選択のためのカードについて

「活動選択のためのカード」は特殊学級担任と交流学級担任が、特殊学級と交流学級相互の学習の様子を把握し、特殊学級児童が得意なことや配慮する必要があることなどを配慮事項としてまとめるカードである。具体的な記入の仕方は、特殊学級の「単元に関連した情報」と交流学級担任からの学習活動状況について具体的に記入するものである。「学習活動選択のための配慮」の欄には、単元に関連した情報から、特殊学級児童の学習指導上の配慮などを記入する。

「活動選択のためのカード」は、これらの記入された情報を基に、活動を選択することをおして、特殊学級児童が見通しや自信をもって取り組むことのできる活動を設定できると考える。

活動選択のためのカード		単元に関連した情報	
A児	学習活動選択のための情報 ○	特殊学級	○
		交流学級	○
B児	○	特殊学級	○
		交流学級	○
C児	○	特殊学級	○
		交流学級	○
D児	○	特殊学級	○
		交流学級	○

【図5】活動選択のためのカード

(3) 単元の指導計画作成について

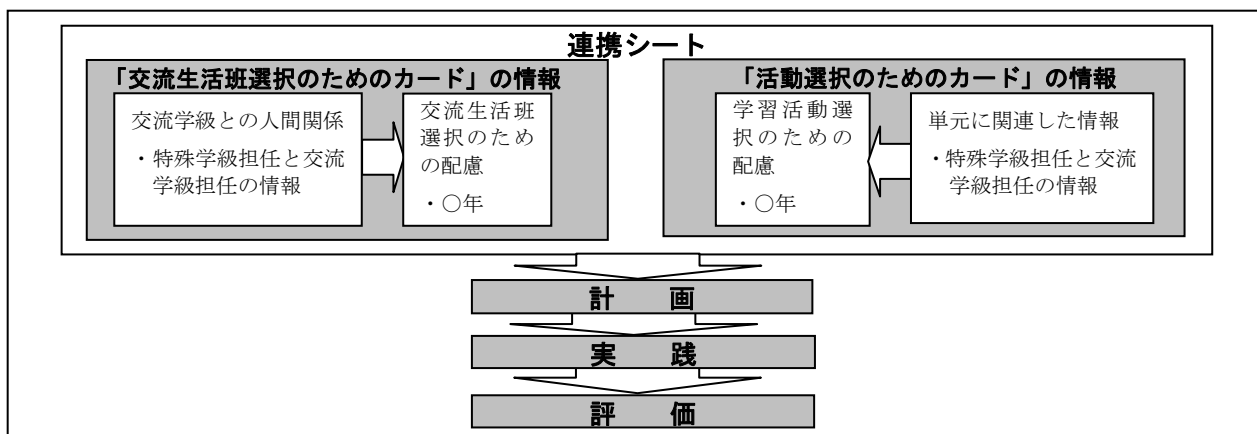
共同学習を計画する際には、特殊学級の教育課程と交流学級の教育課程を関連させ、連携シートの情報を活用する。具体的には、単元構成や単元の目標の設定に活用する。また、単位時間の指導計画を共同活動に設定する場合、生活単元学習などで経験した活動と関連をもたせたり、得意な活動を取り入れたりして、自信や見通しをもって取り組める活動を計画するものである。

(4) 授業実践について

連携シートの配慮を指導上の留意点に生かすことによって、特殊学級児童と交流学級児童とに、個に応じた指導を行うことができると考える。

(5) 評価について

連携シートの情報から評価項目を設定することによって、個々にできたことや課題を把握し、授業のめあての設定や指導の改善に役立てることができると考える。



【図6】手だての試案の基本的な考え方

(6) 検証計画

手だての試案の妥当性をみるため、【表2】のような検証計画を作成し、分析と考察を行う。

【表2】検証計画の内容と方法

検証項目	検証内容	検証方法	処理・解釈の方法
交流学級での特殊学級児童の変容状況	・特殊学級児童の活動状況の変容	○観察法 ・授業実践前と後の教科交流における特殊学級児童のかかわり方の観察	・ビデオ内容から、特殊学級児童の変容を分析し考察する
交流学級担任の連携に対する意識	・校内交流におけるこれまでの交流と本研究の交流の比較	○面接法 ・特殊学級と交流学級のグループとが交流しての感想	・授業実践後に調査し、分析・考察を行う
	・連携シートを活用した指導の有効性	○面接法 ・連携シートを使用しての感想	・連携シートの記入をしての感想を基に、分析・考察を行う

ア 交流学級での特殊学級児童の変容状況について

特殊学級児童の変容状況を捉えるために、一斉指導において教師の働きかけに対して言葉や動作で応答することができる状況や交流学級児童とのかかわり合いについて分析・考察する。

授業実践前後の教科交流（音楽など）において、特殊学級児童の変容状況を以下の2点で分析・考察する。

- ・交流学級児童の働きかけに対して、言葉や動作で応答する状況
- ・交流学級児童に対して、主体的に言葉や動作で働きかけをする状況

イ 交流学級担任の連携に対する意識について

特殊学級と交流学級の共同学習の新しい学習形態や連携シートについて聞き取り調査を行い、交流学級担任の意識を把握し、その内容を分析・考察することで、本研究の手だての有効性について導き出すことができると考える。

4 授業実践及び実践結果の分析と考察

(1) 手だての試案を取り入れた授業実践例

ア 対象 特殊学級1学級（4名）、第1学年1学級（39名）

イ 連携シートの記録

「交流生活班選択のためのカード」の情報		「活動選択のためのカード」の情報	
A児	交流学級児童との人間関係 ○	交流生活班選択のための配慮 6年交流生活班（1班） ○やさしい性格 ○面倒みがいい	学習活動選択のための情報 A児 ○経験したことなどできる ○こねるなどなんでもできる ●手順が分かる活動図を用意 ●低学年とならば、教えながらできるのではないかな ●説明には視覚にうったえるものが必要
	特殊学級 ○△子（やさしい） ○△子（やさしい）		単元に関連した情報 A児 ○切る、まぜるが得意 ○見通しがもてる ●声に出して説明するのが苦手
B児	特殊学級 ○△子と仲がいい	2年交流生活班（8班） ○かわってくれる ○面倒をみてくれる	B児 ○型抜きが集中してできる ●言葉でも教えてもらいながら活動するのがよい ●見通しをもたせるために、活動が終わったことを知らせる
	交流学級 ○△子が面倒をみている		B児 ○型抜きが得意 ○まぜるのができる ○手順については、カード式が分かりやすい
C児	特殊学級 ○女の子だと安心できる	○やさしい ○女の子 ○言葉で教えてくれる	C児 ○やわらかいものなどをこねたりするのが好き ○ゆっくりだとできる ●活動を促すように声をかける
	交流学級 ○△子（面倒をみてくれる）		C児 ○型抜きとまるめるのが得意 ○シールが好き ○繰り返すことができる ●声が必要
D児	特殊学級 ○声をかけてくれる ○面倒をみることもある	1年交流生活班（2班） ○話をきいてくれる ○一緒にしようとする ○やさしく教えてくれる	D児 ○何にでも楽しく活動しようとする ●言葉が短く、分かりやすく ●シールなどで意欲を高める ●経験したことを丁寧にやらせたい
	交流学級 ○		D児 ○型抜きができそう ○まぜる活動が好き ○ほめてもらうと喜ぶ ●あきやすい ○みんなと一緒に活動しようとする

(注) ○できること、●配慮が必要なこと

ウ 単元構成

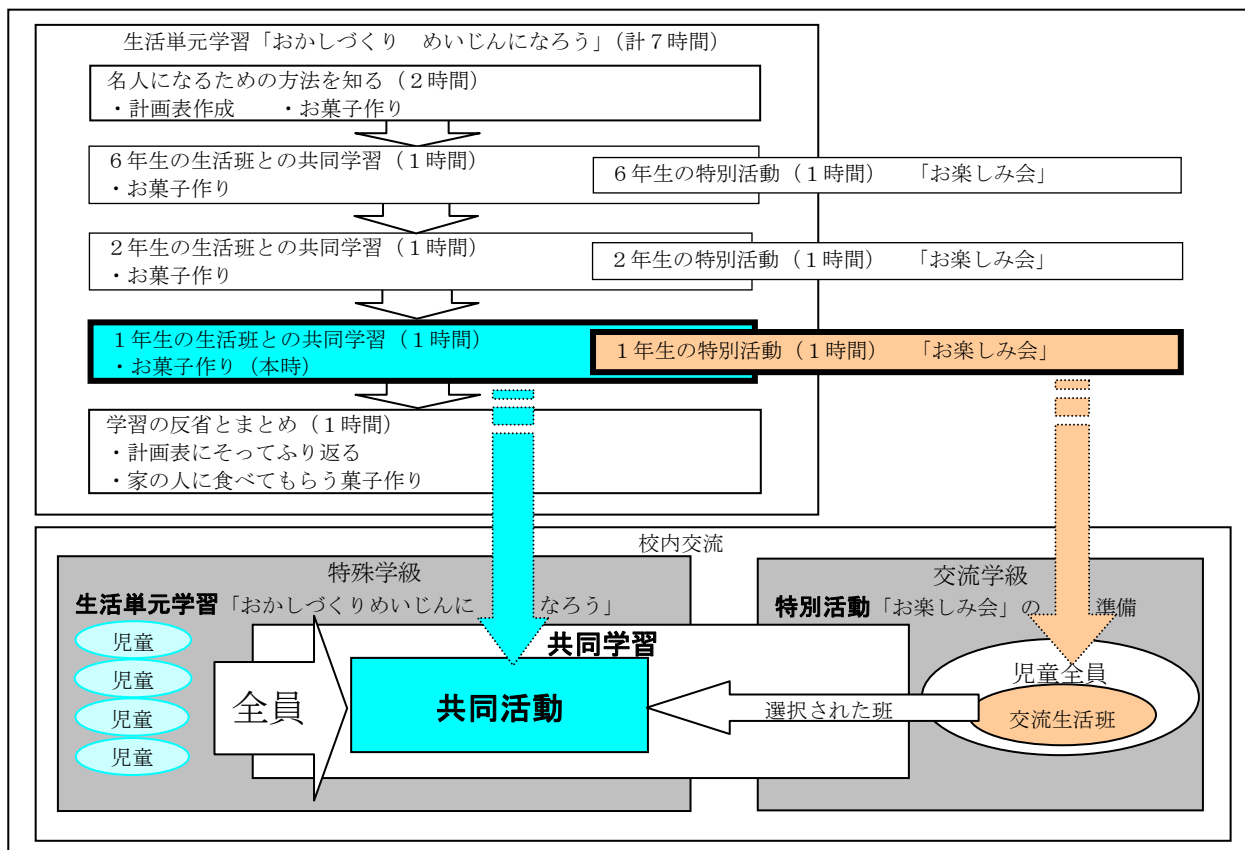
特殊学級は生活単元学習「おかしづくり めいじんになろう」（計7時間）、交流学級の特別活動は学習発表会に向けての「お楽しみ会」（各学年1時間）を設定した。

特殊学級において、導入の2時間で、生活単元学習のクッキー作りに取り組み、特殊学級児童が見通しをもって活動に取り組むことができるように設定した。これは、お菓子作りの方法を学び、交流学級との共同活動に向けて、自信や見通しをもって活動に取り組むことができるように配慮したためである。また、導入段階における特殊学級児童の活動状況を交流学級担任との活動選択のための情報として役立て、共同学習での自信や見通しをもって活動できるように指導上の留意点としても役立てることができた。

特殊学級と交流学級との共同学習は、【図7】に示すとおり、3時間設定し、6年生（1時間）、2年生（1時間）、1年生（1時間）の順番に行った。これは、特殊学級児童が高学年児童から徐々に低学年への段階を経ることにより、受身の姿勢から主体的な姿勢への変容を期待し、交流学級児童との主体的なかかわり合いが増加するように設定したものである。

交流学級の「お楽しみ会」は、学級執行部の提案により、帰りの会などで話し合わせ、企画された。交流学級担任は、特殊学級担任と事前の打合せを踏まえ、特殊学級児童全員と選択された交流生活班とがお菓子作りを行うことを学級執行部の企画の段階で説明し、交流学級児童がスムーズに特殊学級児童との共同活動が行えるように配慮した。

実際の共同学習では、【図7】に示すとおり、特殊学級児童と交流学級から選択された交流生活班がお菓子作りをしている間、他の交流学級児童は、お楽しみ会の出し物の話合いや練習をし、「お楽しみ会」の準備を行った。そして、最後に、共同活動で作ったお菓子を交流学級児童と一緒に食べながら交流学級児童が企画したお楽しみ会に参加するものである。



【図7】本研究における共同学習

エ 単元の指導計画

単元の目標		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割分担が分かり、活動することができる。 ・友達と協力して、活動することができる。 ・友達のいいところに、気付くことができる。 		
次	各次の目標	時	各 時 の 目 標	学 習 活 動
第一 次	<ul style="list-style-type: none"> ・クッキー作りの手順が分かる。 ・先生と一緒に、クッキー作りができる。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ○生活単元学習 ・協力して計画表を作ることができる。 ・作り方について、理解することができる。 ・道具の使い方について、理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○計画表作り ・いつ、なにをするのか確認する。 ○お菓子作り ・クッキーを作る手順を知る。 ・調理道具の使い方を知る。
		2	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割分担を覚えることができる。 ・友達と協力してクッキー作りができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○お菓子作り ・役割分担と練習をする。 ・協力して作る。
第二 次	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のお菓子作りの仕方が分かる。 ・友達と一緒に、クッキー作りができる。 ・お楽しみ会を友達と一緒に、楽しむことができる。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ○6年生との共同学習 ・ペアの児童に教えたり、教わったりしながらクッキー作りができる。 ・お楽しみ会で友達と一緒に、班の出し物などを見たり、聞いたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶 ○お菓子作り ・6年生の1班と協力してクッキーを作る。 ○お楽しみ会 ・会食、クイズなど。
		2	<ul style="list-style-type: none"> ○2年生との共同学習 ・ペアの児童に教えて、一緒にクッキー作りができる。 ・お楽しみ会を友達と一緒に、楽しもうとすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶 ○お菓子作り ・2年生の8班と協力してクッキーを作る。 ○お楽しみ会 ・会食、クイズなど。
		3	<ul style="list-style-type: none"> ○1年生との共同学習（本時） ・ペアの児童に教えながらクッキー作りができる。 ・お楽しみ会を友達と一緒に、楽しむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○挨拶 ○お菓子作り ・1年生2班と協力してクッキーを作る。 ○お楽しみ会 ・会食、ゲーム。
第三 次	<ul style="list-style-type: none"> ・お菓子作りの感想を発表することができる。 ・自分の力でクッキーを作ることができる。 	1	<ul style="list-style-type: none"> ○生活単元学習 ・クッキー作りの感想を話すことができる。 ・自分の力で、クッキー作りができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の反省とまとめ ・ビデオなどを使い、活動を振り返る。 ・お家の人に食べてもらう、クッキーを作る。

オ 個別の単元目標

次	時	A児	B児	C児	D児
第一 次	1	<ul style="list-style-type: none"> 低学年児童の面倒をみることができる。 シロップなど、計量スプーンを使って量ることができる。 活動図（手順を示した掲示物）を見ながら、クッキーを作ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> へらの使い方を教えてもらい、ボウルから粉がでないようにこねることができる。 自分の役割分担の生地のコネかたを教えられながら、生地作りができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型抜きを使い方が分かり、型抜きをていねいに使うことができる。 自分の役割分担の型抜きを教えてもらいながら、きれいに型を抜くことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型抜きを使い方が分かり、型抜きを使うことに慣れることができる。 自分の役割分担の型抜きを教えてもらいながら、型抜きをすることができる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> 低学年児童の面倒をみながらクッキーを作ることができる。 写真を手がかりにして卵の割り方に注意しながら、きれいに卵を割ることなどができる。 	<ul style="list-style-type: none"> やさしく生地を伸ばすことができる。 友達のまねをしたり、教えられたりしながら生地を伸ばすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 棒の使い方が分かり、生地を伸ばすことに慣れることができる。 生地の伸ばし方を教えてもらいながら、棒で生地を薄く伸ばすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 棒の使い方が分かり、生地を伸ばすことに慣れる。 生地の伸ばし方を教えてもらいながら、生地を伸ばすことができる。
第二 次	1	<ul style="list-style-type: none"> 写真や文字カードを手がかりに、クッキーの作り方について簡単に説明することができる。 ペア児童と一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会をみんなと一緒に、楽しむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型抜きを使って、きれいに型を抜くことができる。 ペア児童にやり方を見せて、一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会で、みんなと一緒に班の出し物などを見たり聞いたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型抜きを使って、数多く型を抜くことができる。 ペア児童にやり方を見せて、一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会で、みんなと一緒に行動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 力の入れ加減を考えて生地を伸ばすことができる。 ペア児童に棒の使い方を実際にやって見せることができる。 お楽しみ会で、ペア児童とかかわりをもつことができる。
	2	<ul style="list-style-type: none"> 写真や文字カードを手がかりに、クッキーの作り方について、作りながら説明することができる。 ペアの児童に教えながら、一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会をみんなと一緒に、楽しむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型枠を使い、生地を薄く伸ばすことができる。 ペアにやり方を見せて一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会で、みんなと一緒に班の出し物などを見たり聞いたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 棒の力の入れ加減が分かり、生地を薄く伸ばすことができる。 ペアの児童にやり方を見せたり、教えたりすることができる。 お楽しみ会で、みんなと一緒に行動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 棒の力の加減が分かり生地を薄く伸ばすことができる。 ペア児童に棒の使い方を実際にやって見せることができる。 お楽しみ会で、ペア児童とかかわりをもち楽しむことができる。
	3	<ul style="list-style-type: none"> 文字カードを手がかりに、クッキーの作り方について、説明しながら作ることができる。 ペア児童にていねいに教えながら、一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会をみんなと一緒に、楽しむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型枠を使って、薄く生地を伸ばすことができる。 ペア児童にやり方を見せて、一緒にクッキーを作ることができる。 お楽しみ会で、みんなと一緒に行動することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 型抜きを使って、数多く型を抜くことができる。 ペアの児童にやり方を見せたり、教えたりすることができる。 お楽しみ会で、みんなと一緒に行動し楽しむことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 棒の力の加減が分かり生地を薄く伸ばすことができる。 ペアの児童に棒の使い方を実際にやってみせ、力の入れ具合を言葉（「やさしく」）で言うことができる。 お楽しみ会で、ペア児童などとかかわりをもつことができる。
第三 次	1	<ul style="list-style-type: none"> ビデオを手がかりにして、自分の言葉でがんばったことなどを話すことができる。 低学年児童に教えながら、自分の力でクッキーを作ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ビデオを手がかりにして、したことを話すことができる。 友達のまねをして、一緒にクッキーを作ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ビデオを手がかりにしてしたことを思い出し、自分のしたことを話すことができる。 写真を手がかりにしてクッキーを作ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ビデオを手がかりにして、自分のしたことを言葉で話すことができる。 友達に教えてもらいながら、一緒にクッキーを作ることができる。

カ 第二次における共同学習の基本的流れ

段 階	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	1 学習計画の確認 2 交流学級に移動・挨拶 3 ペア児童の確認 4 めあての確認	<ul style="list-style-type: none"> 生活単元学習で作成した計画表を活用し、活動の見直しをもてるようにする。 安心して活動できるように、ペア児童について分かるようにする。 一人一人が学習内容を分かり、自分のめあてをもって、活動に見直しをもって取り組むようにする。 交流学級児童にも協力して活動することを確認させる。
展 開	5 クッキー作りの手順を確認 6 クッキー作り ○生地を棒で伸ばす ○型抜きをする ○クッキーを焼く 7 活動をふり返る	<ul style="list-style-type: none"> 活動が理解しやすいように写真と文字カードを使ってクッキー作りの手順を説明させる。特殊学級児童が活躍できる場を設定する。 ボードに掲示してある文字カードを裏返し、活動が終わったことを知らせ、次の活動が始まることに見直しをもてるようにする。 特殊学級の児童が自信をもって行える活動と少し協力してもらえたと行える活動を設定する。 一人でできる活動を集中して取り組むようにさせる。協力して行う活動では、役割分担を交代するように促す。 生活単元学習などの既習事項を生かし、自信をもって活動ができるように、教材（型抜きや生地を均等に伸ばすことのできる補助枠など）を個に応じて用意する。 サポート教師の協力を得て、クッキーを焼いている間に活動を振り返らせるようにする。 がんばりカードを使い、自分のよさに気づくようにさせる。 個に応じて、シールなどを使い、がんばりを賞賛し、意欲付けを図る。 友達との協力やよさを認め合うことの大切さを実感できるように促す。
	全 員 と 交 流 す る	8 お楽しみ会に参加 <ul style="list-style-type: none"> 交流学級担任と連携を図り、特殊学級児童が活躍できる活動を設定してもらうように働きかけておく。 特殊学級児童が活躍できる場を設定する。 集会の次第に、交流学習の感想を話す場を設定する。 特殊学級児童のよさを交流学級児童全員に広げ、相互理解に発展させることができるようにする。
終 末	9 学習のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> 学習について、振り返るようにする。計画表の評価欄にはなまるつけて、学習の意欲を高めさせる。 次時の予定について確認し、見直しをもつようにする。

キ 授業記録 1年生との共同学習

- ◎ねらい ・ペア児童に教えながら、クッキー作りができる。
- ・お楽しみ会を友達と一緒に、楽しむことができる。

段階 (分)	□学習活動 ・授業者の主な発問 ■連携シートを活用した手だて	児童の様子 (見通しをもった発言・活動・、・自信をもった発言・行動・、・安心・...) 特殊学級児童へのかかわり (T: 授業者、P: ペア児童、E: 交流学級児童、S: サポート教師)			
		A児	B児	C児	D児
導 入 (7分)	1 計画を確認する。 ・今日は1年生とクッキー作りをします。 ■1年生に行ったときに、元気に挨拶できるように練習させる。	・みんなにあわせて「おはようございます」と言う。	・つられて「おはようございます」と挨拶をする。	・「おはようございます」と挨拶をする。	・S: Dちゃんが行っている学級だから、がんばってね。 ・「はい」
	2 交流学級に移動、挨拶する。 ・Cさん、挨拶お願いします。 ・一緒にクッキー作りをする班の友達に来て下さい。	・みんなに聞こえる声で「おはようございます」と言う。 ・先頭立って移動する。	・「おはようございます」 ・手を繋いで一緒に移動する。	・大きな声で「おはようございます」と言う。 ・手を繋いで一緒に移動する。	・下を向いて小さな声で「おはよう・・・」 ・手を繋いで一緒に移動する。
	3 ペアの友達を確認する。 ・今日は誰と一緒にクッキー作りをしますか。 ■ペア児童の写真を黒板から机の上に移動し、確認させる。	・「Pとクッキー作りをします」	・T: 写真が見易いように顔の近くに移動させる。 ・すぐに「P」と言う。	・写真を手がかりにして「Pちゃん」と言う。	・もじもじしながら「・・・」 ・T: 「Pちゃん」と下を向きながら言う。
	4 めあてを確認する。 ・分からないことがあったら〇〇学級のお友達に教えてもらってください。 ・ペアのお友達と仲良くクッキー作りをしましょう。 ■特殊学級児童とかかわり合いながらクッキー作りを行うように意識付ける。	・「はい」	・すぐに「はい」と言う。 ・E: うなずき「はい」と言う。	・元気な声で「はい」と言う。	・にこにこしながら「はい」と言う。 ・E: うなづきながら「はい」と言う。
展 開 (35分)	5 クッキー作りの手順を確認する。 ・Aさんにクッキーの作り方を教えてもらいます。 ■絵や文字カードを使用して、説明し、活動に見通しをもたせる。	・「のぼす」、「こねる」と文字カードを掲示する。 ・材料をボールの中に入れて混ぜる。「粉を入れます。卵を入れます。」など、はっきりと話しながら、行ってみせる。	・「ボール」と言う。 ・A児が説明している間、身を乗り出し、集中して見ている。	・にこにこしながらA児の説明を聞いている。 ・E: 真剣にA児の説明を聞いている。	・A児の説明をよく聞いている。 ・E: にこにこしながら説明を聞いている。
	6 クッキー作りをする。 ・次は、何をしますか。 ・〇〇学級のお友達がやって見せてください。 □生地を棒で伸ばす。 ・Cさん、薄くなるよう伸ばすといひね。 ・次は、何をしますか。 □型抜きをする。 ・たくさん、型抜きをしてください。10個。9時まで。 ■個数や時刻を提示することで、見通しをもたせる。 ・1年生担任「Eちゃんと一緒にやっていたのね、さすが、Aさんだね、上手、E君も上手だね」 ・焼くところを見ましょう。 ・みんなで協力して片付けましょう。	・生地をみんなに渡す。 ・「棒で伸ばします」 ・ペア児童に伸ばして見せる。 ・P: 集中して生地を伸ばす。 ・ペア児童を見守る。 ・「型抜きです」 ・ペア児童と一緒に型抜きをする。 ・顔を上げて、時計を見る。 ・生地が無くなり、型抜きができなくなる自分から生地を丸めて伸ばし、型抜きができるようになる。	・迷わずに、すぐに生地を伸ばす。 ・交代した後、ペア児童が生地を伸ばしているところをじっと見つめている。 ・顔をあげて、一瞬時計を見る。 ・型抜きを集中して行う。 ・「オープン」と言う。	・すぐに伸ばし始める。 ・Tの言葉掛けに対して、うなずく。 ・交代したときに、ペア児童のことを心配そうに見守っている。 ・「お魚できた」とS教師やペア児童に話しかける。	・S: 両手を添えて1回一緒に生地を伸ばす。 ・生地を伸ばすときに、「やさしく」と教師やペアの児童に話しかける。
	7 振り返りをする。 ・シールとがんばり賞をあげます。 ・クッキーを箱に入れてもっていきます。		・「くま、あとは、きりん」	・P: がんばり賞をもらって、にこにこ笑う。	・「もっと、どうぶつさんシールほしい」
8 お楽しみ会に参加する。 ・交流学級の司会者: 「王様ジャンケンをします、Aさんにジャンケンをしてもらいます」 ■特殊学級児童にも活躍できるゲームを考えてもらうように交流学級担任にお願いします。	・呼ばれるとすぐに立ち上がり、不安な様子も見せずにジャンケンをする。	・ジャンケンをして、負けたら素直に座る。	・1年教室に入った直後は、表情が硬い。 ・E: 「ほっぺたが落ちそうでした」をにこにこしながら聞く。 ・王様になったのはじめは、表情が硬かったが、徐々に、表情が和らいできた。そして、ジャンケンを楽しんだ。	・にこにこしながら、ジャンケンをする。	
9 学習のまとめをする。 ・T: 「1年生さんと一緒に作ったクッキー、上手にできました、はなまるをあげましょう」	・ほほえむ。	・「はなまる」 ・「明日は、何年生」	・にこにこ笑う。	・「やったー」	

【表4】特殊学級児童の選択された活動の取り組み状況の変容

	A児			B児			C児			D児		
	前	後	活動の様子	前	後	活動の様子	前	後	活動の様子	前	後	活動の様子
こねる	△	○	混ぜるのは上手になってきた	△	△	(行わない)	△	△	(行わない)	△	△	(行わない)
型抜き	○	◎	数多く型抜きができた	△	○	途中でしなくなった	○	◎	ていねいにできた	○	◎	やりかたがわかってきた
伸ばす	△	○	薄く伸ばせるようになってきた	△	○	枠を使うときれいにできた	△	○	薄く伸ばすことができてきた	△	○	ていねいに行った
計量	○	◎	正しく、量ることができた	△	△		△	△		△	△	
卵を割る	△	◎	きれいに、割ることができた	△	△		△	△		△	△	

(注) ◎一人でできる、○まねてできる、△支援が必要、前-1時間目・後-1本時(3時間目)

(2) 実践結果の分析と考察

ア 1年生との共同学習から

(ア) 見通しをもたせるための配慮

導入では、特殊学級児童が教師と一緒に生活単元学習で作った学習計画表を使い、共同学習の内容について確認を行った。また、前日の学習の終わりに次時の学習の確認も行った。

その結果、何年生とクッキー作りをするのか、関心をもつ特殊学級児童が多くなった。そのことは「明日は、何年生とするの」など、授業の始めや終わりに、必ず聞いてきたことから確認できた。当日は、どの学年とクッキー作りをすればいいのかが分かったり、お楽しみ会があることについても分かったりと共同学習の見通しをもつことができたと考える。これは、クッキー作りやお楽しみ会を楽しみに待っている表情やクッキー作りのまねをする動作から確認できた。

展開では、活動選択のための連携カードの配慮事項から、写真と文字カードを使用するように配慮した。文字カードを裏返しにして、B児に活動の終わりを視覚的に分かりやすく配慮した。その結果、A児は、見通しをもつことでクッキー作りについて説明できるようになった。また、B児やC児がすぐにクッキーの生地を伸ばし始めた。このように、教師に促されたり、周囲の児童の様子を見てまねたりして活動していた児童が、主体的に活動を始めることができたのは、自信や見通しをもって活動に取り組むことができたことによると考える。また、交流学級児童も文字カードに注目して見通しをもったり、A児のクッキー作りの説明を真剣に聞いてクッキー作りを集中して行ったりすることができた。このように、交流学級児童も見通しや自信をもって学習を行うことができた。

(イ) 自信をもって活動が行えるようにするための配慮

導入では、活動選択のための配慮事項から、何回か繰り返し練習することで自信をもって活動に取り組むことができる児童については、交流学級に行く前に教室で挨拶の練習を行った。

その結果、特殊学級内では大きな声で挨拶ができるが、交流学級ではできなかったC児は、交流学級でも大きな声ではっきりと「おはようございます」と挨拶ができるようになった。これは、練習によって自信をもつことができたことと、特殊学級児童と一緒に活動することで安心感が高まり、交流学級でも普段どおりの挨拶ができたためと考えられる。

また、連携シートを活用しての情報交換から、ペア児童の名前と顔が一致して活動に取り組むことが大切であるとの共通の認識をもった。そこで、ペアの児童の写真を黒板に掲示してい

たが、合計すると8人の顔写真が一箇所に掲示されていることにより、児童によっては写真情報が手がかりとはならず、かえって混乱させる要因になっていることが分かった。そこで、分かりやすい掲示に改め、ペア児童の顔写真を一人ずつ机の上に置くことにした。

このことで、写真を手がかりにしてペア児童を確認する児童やすぐに名前を言うことができる児童が増えた。特殊学級児童は、分からないことがあっても手がかりを使うことで、積極的に活動に取り組むことができた。これは、連携シートの情報が、指導上有効に活用できたためと考える。

A児は、たくさん型抜きができるように、ペア児童のために自分から生地をまるめて伸ばしてあげていた。このことで、A児は更に自信をもって活動をし、それ以降もペア児童の面倒をみることができるようになった。自分のことだけではなく、他の児童と協力して取り組むことができるようになった。

さらに、「活動選択のためのカード」を活用し、交流学級担任との連携により、特殊学級児童が活躍できる場を設定した。

その結果、A児は指名されても、不安な様子も見せずに王様じゃんけんの鬼になり遊ぶことができた。C児は、初め表情が硬かったが徐々に表情が和らぎ、じゃんけんをにこにこして行った。これは、C児の興味・関心をもっているジャンケン遊びを取り入れた活動を設定したことによるものと考えられる。

(ウ) 安心して活動ができるようにするための配慮

特殊学級と交流学級が共同学習を行う場合、特殊学級全員で一緒に活動できるようにし、不安を軽減することができるようにした。

その結果、これまで、特殊学級児童が一人で交流学級に行った際、挨拶をみんなの前で行うことはできなかったが、特殊学級児童全員で一緒に行くことによって、元気に挨拶することができた。これは、特殊学級児童が全員で交流学級に行くことで、安心感を抱いたことによるものと考えられる。このことから、特殊学級と交流学級が共同学習を行う場合、特殊学級全員での学習から始めることにより、不安なく学習に取り組むことができると考える。

また、安心してできるメンバーで活動に取り組めるように配慮し、積極的に学習に取り組めるようにした。

その結果、展開で、C児が「お魚できた」とS教師に話しかけたり、生地を伸ばすときには「やさしく」と教師やペア児童に話しかけたりするなど、自信をもった発言や行動が見られた。これは、交流生活班選択のための情報を活用して、安心してできるメンバーで活動に取り組むことができるように配慮したことにより、積極的に学習に取り組むことができたと考えられる。

さらに、A児が緊張しないで活動できるように、特殊学級の場で、自信や見通しをもって取り組む活動を設定した。

その結果、A児は、交流学級では、一言も話ができなかったが、特殊学級での共同学習では、自信をもって堂々とみんなの前でクッキー作りの説明を行った。これは、普段の学習環境と同じ環境に近い状況での活動であったことが、安心して活動に取り組むことができる要因になったと考える。

その他には、お楽しみ会の会食で、交流学級児童にクッキーを食べた感想を話してもらった場面を設定した。その結果、交流学級児童が「おいしかったです、ほっぺたがおちそうになりま

した」などと、感想を話した。それを特殊学級児童が、にこにこしながら聞いていた。このことにより、特殊学級児童にとって共同学習が、充実して楽しい活動になったと思われる。また、交流学級の児童に対して、以前より親近感を抱いたと思われる。このことをきっかけとして、安心して交流学級児童にかかわれるようになってきたと思われる。

これまでは、交流学級では前述のような特殊学級児童の姿はほとんど見られなかったが、共同学習をとおして自信をもって活動に取り組む姿が多く見られるようになってきた。このことは、活動選択のためのカードの配慮事項を基に、見通しや自信をもって取り組める活動を設定したことによると考える。

以上のことから、特殊学級児童は見通しや自信をもち、交流学級児童と積極的に学習を進めていくことができたと考えられる。

(3) 授業実践前と実践後での特殊学級児童の変容について

交流学級での特殊学級児童の変容状況を【表5-1】、【表5-2】にまとめ、次のとおり分析を行った。

ア 交流学級児童の働きかけに対して、言葉や動作で応答する様子

授業実践前の教科交流では、交流学級児童に働きかけられるが、表情が硬く働きかけに応えることは少なかったが、実践後は、交流学級児童の働きかけに対し笑顔で応えることが多くなった。これは、特殊学級での共同活動や交流学級でのお楽しみ会に参加したことにより、普段の学習よりも交流学級児童に直接的にかかわることが増え、親近感を抱いたことによるとと思われる。

【表5-1】 授業実践前と実践後の特殊学級児童の変容

児童	事前の教科交流	事後の教科交流
D児	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の授業が始まった直後の場面で、前に座っている仲のよい友達から、鍵盤ハーモニカを持ってきたか尋ねられると鍵盤ハーモニカを手を持って見せた。 ・2回ほど授業中に話しかけられるが、答えなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特殊学級児童が発表のためステージへ移動するときに、嫌がらずににこにこして、手を引いてもらう場面が2回あった。

イ 交流学級児童に対して、積極的に働きかけをする様子

授業実践前は、教科交流に対して、消極的な態度が多く見られたが、実践後は、積極的に授業に取り組み、他の児童にかかわりをもとうとする児童の姿が見られた。また、交流学級児童は、特殊学級児童の働きかけに対して嫌がらずに素直に応じていた。このことは、特殊学級児童が共同学習において、交流学級児童と一対で一対で一緒に活動する体験をとおして、安心して交流学級児童にかかわれるようになってきたためと考えられる。交流学級児童にとっては、共同学習をとおして、真剣に活動している姿など特殊学級児童のよさを知り、特殊学級児童を認め、同じ友達として受け入れられるようになってきたためと考える。

【表5-2】 授業実践前と実践後の特殊学級児童の変容

児童	事前の教科交流	事後の教科交流
A児	<ul style="list-style-type: none"> ・体育のドッジボールではボールに1回も触れる事無く逃げていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育のドッチビーでは、自分に飛んできたフリスビーを交流学級児童と取り合えるようになった。4回中3回取ることができ、投げ返すことができた。
D児	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートの教師に確認したところ、自分から交流学級児童にかかわりをもつところを見たことがないと話していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽では、体育館での整列の場面で、隣の男子に手を横に置くように教えた。2回連続して行った。交流学級児童は素直に応じた。

(4) 指導実践後の交流学級担任の意識について

交流学級担任の意識について、聞き取り調査の結果を【表6-1】、【表6-2】、【表6-3】、【表6-4】にまとめ、次のとおり分析を行った。

ア これまでの交流と本研究にかかわる交流との比較について

交流学級担任は、特殊学級の学習と交流学級の学習を関連させて共同学習を行うことによって、今までの交流学習よりもふれ合いの機会が増加したことや交流学級でも特殊学級児童が自信をもって活動している姿が多くみられるようになってきたととらえている。このことから、普段かかわりがなかった児童が、特殊学級児童とかかわりをもつ機会を与える有効な学習であることが分かった。

連携シートを活用して特殊学級担任と交流学級担任が情報交換を行い、児童や学習に関することを共通理解したことで、特殊学級児童はもとより交流学級児童にとってもプラス面があったことを交流学級担任からの感想で裏付けられた。

【表6-1】授業実践後の交流学級担任の意識

交流学級担任の感想
<ul style="list-style-type: none">・A児にとっては、自分一人ではなく、特殊学級のリーダーという自覚もあって、交流学級の教室でも心なしか胸をはって交流にあたっていたように思った。・選択された生活班のメンバーの中には、それまで、特殊学級の子とのふれ合いがほとんどなかった子もいるが、声をかけたり、手をつないだりといった、ふれ合いの機会が生まれた。・今までの交流では、特殊学級児童と交流学級児童とが交流することが難しい面もあった。しかし、今回は学級活動ということもあり、交流の幅や深さが大きくなったと感じた。新しい交流のスタイルを考える一石にはなったと思った。・教師の働きかけによって、その効果はかなり変わっていくと当たり前のことだが改めて痛感した。プラスの方に大分押し進められ手ごたえを感じた。

イ 授業実践後、交流学級での児童の変化について

交流学級担任が実践後の感想で述べているように、特殊学級内では会話ができるものの、交流学級では話すことができなかったA児が、交流学級児童のいる前で話すことができたことは、交流学級担任はもちろんのこと、交流学級児童にとっても驚きであったろうと推察される。これは、A児が共同学習において、自信や見通しをもって話すことのできる内容と方法を個に応じて設定したためである。具体的には、生活単元学習において、クッキーの作り方をビデオや写真及び文字カードを使用して、A児が、見通しをもって活動することができるように配慮した結果、自信をもって活動に取り組むことができるようになった。その体験を利用して、実際に低学年児童に写真カードや文字カードを使いながら説明する場を設定した。そして、交流学級児童の前で話す機会を増やすことで、話すことへの抵抗感が減少し、話すことへの自信が増していった。このことが、交流学級での特殊学級児童の発言につながったと考えられる。

共同活動で培われた自信から誘引された交流学級での発言によって、A児は自信が増し、他の活動に取り組む意欲をもつことができたと考えられる。それに伴って、交流学級担任が述べているように、交流学級で積極的に取り組む姿が見られるようになったと考える。

また、共同活動で直接的にふれあった交流学級児童は、特殊学級児童の真剣で一所懸命に活動している姿など、新たに発見したことが多数あったと思われる。さらに、一緒に活動する中で教えられたり、教えたりと共に活動する楽しさを感じて、上記のような「また、一緒に作ろう、作りたいな」といった言葉が交流学級児童から自然に発せられたものと考えられる。そのことから、交流学級児童にとって特殊学級児童の理解につながったと考える。

実際の場面では、交流学級児童たちが、楽しそうにクッキー作りに集中して取り組んでいた姿

から、交流学級児童にとっても本研究の共同学習は、一人一人の児童にとって充実した活動になっていたと考える。

【表6-2】授業実践後の交流学級担任の意識

交流学級担任の感想
<ul style="list-style-type: none"> ・交流後、学習発表会の劇のセリフを練習時に言うことができた。初めてA児の声を聞いたという子が多数いた。音楽の学習では、みんなと楽しく活動している様子がうかがえる。あまり得意とは言えないボール運動であるが、少しずつ積極的に参加しようとする姿勢が見受けられるようになってきた。 ・「また、一緒に作ろう」等、心の面で、特殊学級にかかわっていきこうという意識をもつ子どもが増えたように思われる。このような定期的な交流が前述のような意識を高め、交流を深めていく態度が出てくると思われる。会の後、子どもの中には「早く続きをしたい」「発表を見せたい」という児童も少なからずいた。

ウ 交流生活班選択のためのカードを使用しての改善点等について

連携シートは、記載項目を絞って、指導上必要な情報に限ったことにより視覚的にとらえやすい形式であることが交流学級担任に認識されたと考えられる。記載内容が多ければ多いほど連携内容が複雑になるため、項目を精選して作成したことがよい結果に結びついたと考える。

また、交流学級担任と特殊学級児童の情報交換を行ったときの印象や授業実践後の聞き取り調査「児童の実態と配慮事項」に関する交流学級担任の感想から、特殊学級児童の実態と配慮についての情報が、交流学級担任の必要としている情報であることが推察できる。

【表6-3】授業実践後の交流学級担任の意識

交流学級担任の感想
<ul style="list-style-type: none"> ・連携シートの形式は、他の種類を見たことがないので比較できないが、見やすい形式だと思った。 ・特殊学級児童の実態→配慮内容というようにすれば、簡潔になるのではないかと考えた。

エ 学習活動選択のためのカードを使用しての改善点等について

特殊学級担任と交流学級担任が、カードの使用をとおして特殊学級児童の実態を交流し合うことにより、特殊学級での児童の様子と交流学級での児童の样子の違いについて認識することができた。そのことが、交流学級での授業において特殊学級での学習の取組状況を生かした指導の必要性を交流学級担任が感じたと思われる。よって、今後の交流学級での指導に特殊学級担任との連携による情報を生かした取組がなされていくものと考えられる。

【表6-4】授業実践後の交流学級担任の意識

交流学級担任の感想
<ul style="list-style-type: none"> ・クッキー作りに関連した教科での交流があればより具体的に活動選択のための情報が得られた。 ・単元の必要な事項が分かりやすく明示されており、よいと思った。 ・現状を分析して活動目標を決め、活動内容を決定するのは必要なことだと思った。

以上の(1)～(4)の分析と考察から、特殊学級と交流学級との共同学習において、交流学級の小グループとの共同活動を設定し、連携シートを活用した指導を行うことは、交流学級の児童とかかわろうとする態度を育てることに有効であったと考える。

5 小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する研究のまとめ

手だての試案に基づく授業実践を行い、実践結果の分析と考察をとおして明らかになったのは、以下のとおりである。

- (1) 特殊学級と交流学級の教育課程を関連させたことにより、特殊学級は生活単元学習で学んだことを生かし、特殊学級児童が自信や見通しをもって取り組める活動を一人一人に応じて設定できることが明らかとなった。
- (2) 交流学級の教育課程に共同学習を位置付けることにより、事前指導と事後指導が計画的に進められ充実した。

- (3) 交流学級児童は、特殊学級児童と一緒に集中して活動に取り組むことができた。このことから、交流学級児童にとっても共同活動は一人一人に応じた配慮を可能にし、教育効果があった。
- (4) 連携シートを活用することによって、特殊学級担任と交流学級担任が情報を共有して指導に当たることができ、教科交流においても情報を生かした指導の工夫がなされるようになった。
- (5) 共同学習において、意図的に特殊学級児童全員と選択された交流生活班が共同で取り組むペア学習や班活動を多く設定したことにより、既存の交流学習よりも児童同士のかかわり合いが増加した。また、共同活動をする場所を特殊学級に設定したことにより、特殊学級児童は慣れた環境の中で、安心して積極的に学習に取り組むようになった。
- (6) 共同学習がきっかけとなって、特殊学級児童と交流学級児童のかかわり方に変化が生じ、その後の教科交流で特殊学級児童が、交流学級児童に主体的にかかわる姿が見られるようになった。
- (7) 交流学級担任が、特殊学級児童にかかわっていこうとする意識をもつ児童が増えたと感想で述べていることから、交流学級児童の意識の変容が明らかとなった。
- (8) 特殊学級担任が、交流学級担任からの「交流生活班選択のためのカード」と「活動選択のためのカード」の情報をより簡単にまとめられるように、連携シートの項目の吟味等、内容を簡略化していく必要がある。

以上のことから、特殊学級と交流学級との共同学習において、「交流生活班選択のためのカード」を作成し、その情報を基に交流学級と共同活動する小グループを選択することや「活動選択のためのカード」を作成し、その情報を基に共同活動を行うことにより、特殊学級児童一人一人に応じた校内交流を展開できることが明らかとなった。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本研究は、小グループ編成した交流学級との共同活動をとおして、特殊学級児童にとって一人一人に応じた校内交流の展開の仕方を明らかにし、特殊学級の校内交流の充実に役立てようとするものである。

そのために、小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する基本構想に基づき、小グループ編成した交流学級との共同活動の指導を行うための手だての試案を作成し、授業実践をとおして手だての試案の有効性を検討してきた。その結果、成果として得られたことは、下記のことである。

- (1) 小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開についての基本構想の立案

小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開についての基本的な考え方として、共同学習の意義を明らかにし、特殊学級の教育課程と交流学級の教育課程を関連させた展開と共同学習と共同活動に視点をおいた展開を構想し、研究の基本構想を立案することができた。

- (2) 基本構想に基づく実態調査及び調査結果の分析と考察

基本構想に基づき、交流学級での指導の工夫・留意事項の分析から、交流学級において、自信と見通しをもって取り組むことのできる活動を設定する手だてが必要であることが明らかになった。また、特殊学級と交流学級担任との連携の分析から、特殊学級担任と交流学級担任とが短時間で必要な情報を簡単に交換できる手だてが必要であることが明らかになった。

(3) 基本構想に基づく手だての試案の作成

基本構想及び実態調査結果に基づき、特殊学級担任と交流学級担任との連携をとおして、特殊学級児童にとって安心してかかわることのできる交流生活班を選択したり、特殊学級児童が見通しや自信をもって取り組むことのできる活動を設定したりするための「交流生活班選択のためのカード」と「活動選択のためのカード」を手だての試案として作成することができた。さらに、そのカードの情報を一枚の連携シートにまとめ、その情報を単元の指導計画、実践、評価を組む手がかりとして活用できた。

(4) 指導実践及び実践結果の分析と考察

手だての試案に基づき、単元の指導計画を作成した。そして、単位時間の指導計画を作成し授業実践を行い、児童の変容の分析と考察を行った。また、交流学級での児童の変容を交流学級担任に聞き取り調査を行い、手だての試案に基づく校内交流の展開の仕方の有効性について分析と考察を行った。その結果、手だての試案が特殊学級児童一人一人に応じた展開の仕方を可能にし、児童の主体的な態度を育成することに有効であることが確認できた。

(5) 小学校の特殊学級における一人一人に応じた校内交流の展開に関する研究のまとめ

小グループ編成した交流学級との共同活動の指導は、特殊学級児童一人一人に応じた校内交流の展開が図られ、児童の主体的なかかわりを促進していくことに有効であることが確認できた。

2 今後の課題

本研究をより今後に生かすための課題として次のようなことが考えられる。

- (1) 連携シートを活用した共同学習の事例を検討して、連携シートを改善していくこと
- (2) 共同学習の展開において、児童が相互に力を合わせて取り組めるように、学習内容に配慮すること
- (3) 交流学級の特別活動の年間指導計画に特殊学級との共同学習を位置付け、共同学習を計画的に進めること

<おわりに>

長期研修の機会を与えてくださいました関係諸機関の各位並びに所属校の諸先生方と児童のみなさんに心から感謝申し上げます、結びのことばといたします。

【参考文献】

- ・位頭義仁（1997）,「交流教育における授業分析の研究」,『鳴門教育大学 学校教育研究センター 紀要』No.11, 鳴門教育大学学校教育センター
- ・精神薄弱教育実践講座刊行会（1994）,『精神薄弱教育実践講座 第15巻 交流教育』,（株）ニチブン
- ・全日本特殊教育研究連盟（1993）,『学校生活づくりのための生活単元学習ハンドブック 発達の遅れと教育』別冊⑧, 日本文化科学社
- ・高井紀子（1999）,「全校と触れ合う交流教育の実践」,『特集 交流教育 《季刊》特殊教育』No.95, 東洋館出版社
- ・松田修一他（2001）,「特殊学級児童と通常学級児童が共に学び合い, 高め合える校内交流のあり方」『仙台市教育課題研究集録－第24集－〈第27回教育課題研究発表会研究集録〉』, 仙台市教育センター
- ・村田隆則（2001）,「共に生き, 共に学ぶ人間性豊かな児童を育てる指導はどうあればよいかー特殊学級における生活単元学習と通常の学級における総合的な学習の時間を融合させた交流学習を通してー」,『仙台市教育課題研究集録－第24集－〈第27回教育課題研究発表会研究集録〉』, 仙台市教育センター
- ・山下仁志（2005）,「特殊学級の授業と交流学級での授業の工夫～国語科と図画工作科における学習の実践～」,『特集 教科指導の工夫と改善 《季刊》特別支援教育』No.17, 東洋館出版社